

## 「子どもと死」の問題

～子どもといっしょに、どのように「死」を生きることが可能か～

尾 上 明 子

### はじめに

昨年は、「子どもと死」をめぐるいくつかの問題を取りあげ、まず今日の子どもを取り巻く環境から、「死」のリアリティが希薄になってきていることについて述べた。

その際、バーチャルリアリティだけの世界ではなく、様々な情報により社会の現実を見せつけられる子どもやこの問題を扱うことの難しさについても述べた。そして、レギーネ・シントラーの「子どもといっしょに、どのように死を生きることが可能か」というテーマを念頭においてキリスト教保育の持つ使命を考えつつ、児童文学や絵本や映画などを取りあげ考察を試みた。

本年は、現実の子どもが持っている「死」とはどのようなものか、特に子どもの持っている「生と死」に拘わる根元的な問いに焦点を当てることにした。なぜならば子どもは、常に「今あること」を確かめている存在だからである。子どもは「今あること」すなわち、「生きること」・「死ぬこと」を表裏一体として考えていると言って過言ではないからである。

1982年、読売新聞・家庭欄に掲載された3歳の田中大輔ちゃんの言葉、「あのね、ママ、ぼくどうして生まれてきたか知ってる？ぼくね、ママに会いたくて生まれてきたんだよ」の言葉は詩人、宗左近氏によって取りあげられ、次のように言わしめた。「一読驚倒します。人類の難問を一挙に解決しています。ママニ アイタクテ、何という愛の真理。宇宙の謎が氷解します。しかも何という無邪気さ。天使です。神さまが人間をお生みになったのは、いつかこういう言葉を言ってほしかったからに違いないのです。……宇宙と人間を結ぶ愛の力を詩が差し出すとき、詩は宗教と同じものになるのです。」と。(川崎洋編、花神社) また、本論で取りあげた事例の中の子どもの言葉、「生きているものは、みんな死んじゃうの?」「ぼくは、いつ死ぬの?」「ママ、たましいってなに?」などの問いも、まさに人間存在そのものと真理を追求しようとしている叫びのような気がするのである。

私たちおとなにとっても「死」は大きく、重いテーマである。しかし、シントラーは、「死は幼児期から始まります。死は両親、子どもたち、教育者を結び合わせます。全ての人は、死を自分の内に持っているのです。それについていつも話されている必要があると言うわけではありませんが、人はそれと共に生きています。」と述べている。つまり私たちが、子どもにとっての「死」を考えようとするとき、それは同時に私たち自身の「死」を考え語ることに繋がるということを実感しなければならないということである。

今回、事例をくださった保育者や親は、まさに「子どもといっしょに、どのように死を生きることが可能か」を追求している方々である。この貴重な事例から前回に続き、テーマを掘り下げていきたいと思う。

### 【方法】

次のような自由記述のアンケートを保育者及び親にお願いした。

子どもは、私たちおとなが思っている以上に、「生きること・死ぬこと」を考えているようです。「死」を考えることは、「生きること」を深く考えることにつながります。

つきましては、あなたのご経験の中で、「生きること・死ぬこと」についての子どもの言動について、どんなことでも結構ですからお教えくださるとうれしく存じます。

具体的には、

- 子どもの周辺におこった「死」に関するできごと（肉親の死・小動物や昆虫の死・自然界の現象・植物にかかわること。
- 苦しみや病気にかかわること。
- 人間の老いにかかわること。
- 物語や絵本を通して受けとめたこと。
- 暗闇や眠りとのかわりについて。
- 神様・天国・地獄・良い子・悪い子・閻魔様など。
- クリスマス・イースターと関連して。
- 子ども自身の死とその親について。
- マスコミを通して。

## 第一章 子どもと小動物の死

### 【事例】

#### 事例①（2歳）

ミミズの死骸にアリが群がっている。保育者「あ！何かいるよ！」子ども「あそんでるのかな？」「死んでるよ」「また、おきるかな？」（保育者は、意識して敢えて何も言わなかった。）

#### 事例②（4歳）

クラスで育てていた金魚が、泳ぐ元気がなく底に横たわっているのを見て、子どもA「先生！大変！死んでいるよ！」子どもB「え！ねむっているんだよ！」保育者が、その金魚を手にものせて見せると口をぱくぱくさせているのに気づく。子どもB「ほら、口がうごいてる。ねてたんだよね」「でも、そうやってねないよ」保育者、「体が弱ってるんだね。みんなが幼稚園にくるときは、いつも横になってるかな？」子どもたち「ううん。こうやっておよいでいるよ」「ねえ、私にもさわらせて！」と自分の手にとり、確認したい子、やさしく撫でている子など。その後、度々見に来ては、「少し動いた。元気になってきたよ」と言っていた。

翌日、金魚は死んでいた。保育者は、そのまま、水槽に入れておくのがよいか、引き上げて別の入れ物に移した方がよいのか、気づいた子どもに知らせる方がよいのか迷ったが、そのままにしておいた。真っ先に、水槽の所に来た子どもたち4・5人。「先生！うごいていない！ほら、お口もぱくぱくしてない。死んでる」「出してみて！死んでるかも」

保育者が引き上げて見ると死んでることを改めて理解する。子ども「どうして死んだのかな」「私、お祈りしていたのに」保育者、「この金魚はお部屋に来たときから大きかったでしょ。もしかすると長い間生きていて、おじいさんかおばあさんになっていたのかも。たくさん生きて今は神様の所にいったのかもしれないね」子ども「おじいさんかな？おばあさんかな？」子ども「そうだよきっと。神様が、金魚が飼いたくて飼ってくれてるよ」「先生！でも目があいてるからまだ生きてる」「ちがうよ。金魚は目がとじないように、神様がつくったんだよ。」「ぼくは目とじれるよ」

#### 事例③（5歳・女兒）

アスファルトの上に落ちていたスズメを手にとって「死んでるみたい。やわらかーい」「病気で死んじゃったのかな？」「家に持って返ってお墓を作ってあげる」といって両手に包んで持って帰り、スコップで穴を掘り、サザンカやツバキの花と一緒に埋めた。数日後、「あのスズメ、もう生き返ったかな？」と言った。

## 事例④（5歳・女兒）

クラスで飼育していたうさぎが死に、そのうさぎが生き返った夢を数日見る。やがて、「もう、うさぎはいなくなった」と受け入れられるようになった。

## 事例⑤（3歳・男児）

園の庭に落ちていたスズメを「かわいそう」「ねているのかな？」「うごかないね」「どうしたんだろう」とそれぞれ思ったことを言っていた。その様子を少し離れたところで見っていた子どもが「せんせい、ぼくいつ死ぬの？」と聞いた。

## 事例⑥（5歳児）

クラスで飼っていたうさぎが、夏期保育の直前に死ぬ。保育者は、翌日、敷物の上のせたくさぎを置いておいた。子どもたちは、「びっくりした」「悲しい」「お墓を作ってあげよう」「花を飾ってあげよう」と話す。保育者は、子どもたちが死をどのようにうけてめているのか。今までに、動物の死、人間の死に直面したことのある子と今回のうさぎの死がはじめて直面する死という子と違った反応であったことを報告している。死に直面したことのある子どもは、「死んでしまったら、もう、もどってこない」「墓にうめたら土になる」「悲しいけど仕方がないこと」などと死を現実的にとらえている。はじめて死に直面した子どもは、「きのう死んでたけど、きょうはどこにいるの？」「お墓からでてくるのはあした？」「今はねむっている」「お空にいて星になるねんで」「死ぬっていうことはかたまること」と死がどういうものなのか考え空想している。また、悲しくて不安な気持ちになり、かたまっているうさぎに触れ、目をあけないうさぎを見て死というものを感じていた。お墓をつくり、気持ちの整理がついた次の日、クラスで話し合う。その時、保育者は、死ぬこと＝空に行く、星になるという説明は避け、死んでしまったこととして話し合うことにした。

「きのうは死んでいたけど」と言っていた子どもは、「お墓にうめて、さびしいけど、でもうさぎもよろこんでいると思う」、また、他の子は、「お墓の中にえさをいれておいたから大丈夫」、よく観察していた子どもは、「赤い耳がくろくなった」「死んだらどれくらいでかたまるのかな」などと話し、大好きだったうさぎが死んでしまい、見えなくなっても生きているように感じている。

## 【考察】

◇ほとんどの子どもにとってのはじめての死は、シントラーが言うように、それは生の最終とは考えないようである。死とは、動かなくなることであったり、眠っている状態であると考えている。また、「きのうは死んでいたけど、今日はどこにいるの？」というよう

に、どのようになったか状況を理解できない子どももいる。それ故、動かなくなった生き物がしばらくすると、もとにもどる、どこからか帰ってくる、また生き返るのではないかと思っている。(事例①②③⑥) 但し、年齢や発達と必ずしも一致していない。ここで提示したスズメのお墓を作った5歳児は、母親のコメントによると土にうめることは種をまいて芽がでるような感覚ではないかと記している。

◇ クラスでうさぎを飼っていたが、いつもそのうさぎに特別の関心を示し世話をしていた5歳児(女児)は、年末に死んだうさぎの生き返った夢をお正月の一週間に何度も見る。1月8日になって、ようやく「もう、うさぎはいなくなった」と思うようになるが、けっして忘れたわけではなく、年末のことを知らなかった他のクラスの先生に丁寧に教えている。(事例④) このことから、目の前に存在していたものが、居なくなってしまうことを時間の経過とともに知るようになるのではないだろうか。それは何より、そのうさぎへの愛着度によるのではないだろうか。

◇事例⑤は、2歳児のクラスで3歳になったばかりの男児であるが、スズメの死を自分の「今あること」と結びつけている。

◇保育者の対応として、事例①は、ミミズの死骸を食べているアリの様子に「あ！何かいるよ！」と注目させ、保育者自身は何もしない。言わない。子どもにありのままを見せ、また、考えさせている。2歳児にとってほとんどの子どもは、ミミズとアリが遊んでいるようにみえたが、死ぬということを漠然と知っている子どももいる。保育者が、「今ある」子どもをそのまま受け入れることが子ども自身に考えさせていくことになると思われる。

◇事例②⑤⑥についても、保育者の基本的な姿勢は前述(事例①)と同じである。②においては、とうとう金魚が死んでしまったが、保育者は迷いながらも、やはり子どもにありのままの姿を見せることにした。⑤の例は、その後、保育者は礼拝において、まだ知らない子どもたちにも、タオルの上においたスズメを差し出した。その時、子どもたちは、口々に「かわいそうー」「かわいそうー」と言い順々に手で触ってみる。子どもたちは、こわごわというのではなく、本当に一生懸命やさしく撫でたということである。「どうしたんだろう?」「寝ているのかな?」「気持ちいい(触って)」「起きるかな?」「動かないね」などと表現する。保育者は、生きているものはいつか必ず死が訪れることを伝えたいと思い、敢えて礼拝という場に持ってきて小鳥を見せたと言う。「どうしてかわからないの。でもね。死んじゃったの。動かないの」(事実だけを説明する)

小鳥の死といえども死は、息をしていたものがしなくなるという厳粛な事実であることに違いない。このことを、おとながどのように考え、扱うかにより子どもに伝わるものが違って来るであろう。おとなが死を不浄なものとして嫌い、「そんなもの触っちゃいけません！」という言葉を投げかければ、また、どこかでそのように思っているとするならば

それもまた、伝わっていくに違いない。

## 第二章 子どもと老人の死

### 【事例】

#### 事例①（5歳児）

園の敬老の日の集まりで、「おばあちゃんいくつ？」と聞き、答えてもらい「もう、死ぬやん」と言った。保育者は、子どもとして素直で率直な言葉として受けとめたが、後で子どもたちと話し合い、その方に謝ろうということになった。代表して、その方の孫が電話をしたら、そんなことはと言って笑いとばされたということである。

#### 事例②（3歳・女兒）

曾祖母の葬式の間、「おばあちゃん、どこへ行くの？」「お空へ行ってなにをするの？」とずっと聞いていた。最後に、「生きてるものはみんなしんじょうの？」と質問する。

翌日、保育者が「おばあちゃん、お星様になったのね」と言うと「ちがうの。けむりになってお空に行ったの」と応えた。

#### 事例③（4歳・男児）

園児の祖父が治る見込みのない病状になり、母親に「死んだらどうなるの？」「お父さんもお母さんも死ぬの？」と聞き、よく泣くようになった。保育者に対して、「こんな時どのようにしたらよいでしょうか」という相談があった。

#### 事例④（4歳・男児）

母親が出産のため里帰りしていたとき、子どもの祖父が異常行動を起こしたため急遽、その祖父と同居することになった。はじめのうちは、母親が赤ちゃんの世話で手がかかるため、祖父は良い遊び相手、膝の上に乗ったり、ひなたぼっこをしたりしていた。しかし、祖父の痴呆が進むと、だんだん気味悪く感じるようになっていき、最後には祖父が座っているイスの周りにクッションを並べてバリケードを作ったりしていた。その祖父が、3ヶ月の入院の後亡くなったことを聞いた時泣きだし、お通夜の時も「ぼくは、仲良しだったんだ」と一人で泣いていた。

#### 事例⑤（5歳・男児）

園児の母親から園長に母親の父についての相談があった。癌の末期で苦しまずに最後を迎えられるようホスピスに入院していた。母親は、死にゆく父親を前にして自分の気持ちさえコントロールできない状態であったが、なんとかマイナスのイメージを持たせないでこの死を息子に体験させることができないか悩んでいた。園長と相談して、「子どもも一

人の人間として尊重し、きちんと事態を伝え、その上でどうしたらよいか選ばせるということ」に考えが落ち着いた。子どもに話すと「Aちゃんはね。今はおじいちゃんのところに行きたくないんだけど、行きたくなったら連れていってくれる？」と言ったので母親は、「もちろんだよ。ママが病院に行ってるときでも、〇〇のおじいちゃんに言ったらすぐ連れてってくれるからね」と応えた。

翌日の午後、母親の姉が「お父さん、まるで誰かを待っているみたい」と言った時、それが孫のAを待っていると確信したので、すぐに電話をした。Aは、自分から「おじいちゃんのところへ行く」と言い、病室で「Aです。おじいちゃん、今までありがとう！」と言って手を握った。翌日の朝方、祖父は亡くなった。

母親は、園長に相談しなかったら、自分勝手な判断で誰よりも孫の成長を楽しみにし、可愛がっていた父にAを会わせず、Aには、お通夜と告別式にだけ参加させ、死を何か自分から遠い世界のできごとと感じさせてしまったかもしれなかったと述懐している。

Aは、おじいちゃんの話は、全く口にしないが時々「ママ、たましいって何？」と聞いたりする。

### 【考察】

◇事例①は、子どもが老いることと死ぬことは何か関係していると予感している例である。この場合、子どもは全く自然に発した言葉であったが、保育者はそのことは良くわかりつつも、子どもたちと後に話し合い、謝ることになったという。シントラーも述べているように子どもの多くが老人と死を結びつけて考えていると思われる例である。

◇事例②③は、人間が死ぬとどうなるのか、どこへいくのかという根元的な疑問を子どもから突きつけられているのであるが、この問題に答えられる人はおそらくいないであろう。おとなにとっても解らないこと、否、人類有史以来のこの永遠のテーマを簡単に答えること自体、考えてみれば子どもを軽視していることに繋がるのではないだろうか。「人間が死ぬとお星様になる」ということを納得しない子どももいるということをおぼえておかなければならない。むしろ、私たちが、子どもによかれと思っていることの中に、子どもが生と死を真剣に考えようとしている芽を摘んでいることもあるということである。

◇事例④⑤は、子どもが実際に肉親（祖父）の人生の最後の時に遭遇したとき、周りのおとながどのようにこのことを考え、対処するかという問題である。特に⑤の例は、私たちに多くの示唆を与えてくれる事例である。この母親は、園長と相談することによって、死が与えるであろうショックより、子ども自身を信頼することを選んだのである。その結果、子どもが今後どのように人間の生と死を捉えていくかわからないが、少なくとも自分が一

人の人間として大事に扱われたこと、そして、人間がどのように死んでいくのかを心深く受けとめたに違いない。ここで紹介しなければならないのは、園長が勧めた『さよならっていわせて』（第4章参照）という絵本である。これによって「ママ、たましいってなに？」と子どもに言わしめたのかもしれない。

### 第三章 子どもと兄弟・肉親の死

#### 【事例】

#### 事例①（3歳・妹1歳半）

園児Yの妹がお風呂で事故死した。保育者は、クラスの子どもたちに死というものをただ恐怖心としてとらえるのではなく、限りある命が花にも虫にもあるということを知ってもらうため、そのままの事実を話した。すでに、各家庭で話された後だったので「しってるー。おぼれたんやろー」「死んでんでー」中には、「Yくん死んだん？」と大変なこととして受けとめたのは、担任の予想外にほとんどなかった。

二週間後、Yが登園、「Yくんおはよう」「うぁーきたん？」「一緒にあそぼ」と今までと変わりなくYと接していた。

保育者は、礼拝の中で妹の話をし、「一緒に遊びたいと思っても遊べない、お話したくてもできない、とても淋しくて悲しんでいるYくんのために」お祈りした。子どもたちは、いつになく真剣に祈っているようだった。

その時、Yの横に座っていた男児が「死ぬってあかん」とYに耳打ちし、二週間前とは少し違う気持ちで「死」について考え始めたようだった。保育者は、3歳児と「死」について考えるのは難しいと思ったが、事実は事実として伝え、これからも共に考えていきたいと思っている。

#### 事例②（4歳・女兒）

Tが4歳の誕生日を迎えた月に母親が発病、急性の癌と診断され、余命1ヶ月半との宣告のもと入院生活に入る。父親は休職し、遠く離れていた祖父母が母親に代わって身の回りの世話をするという生活が始まった。初めは、「パパがずっといるんだよ」「おばあちゃんがおはんつくってくれるの」と笑顔で保育者に報告していたが、母親との面会がままならない状況が続くようになって、少しずつ笑顔が減り、以前に比べ何かにつけて泣くようになった。しかし、家庭では、年子の妹の面倒をよくみ、お手伝いをし、むしろ「わがママをいわなくなって、とてもいい子でかえって不憫である」との報告を父親から受ける。

その頃、保育者に「先生、ママはもうよくなるんじゃないの？」「妹がね、『ママが



いいよ』って毎日泣いてパパがかわいそうなの。だから、Tちゃんはもう泣かないって決めたの」と言った。

診断の通り、悪化する一方の母親に週一度の面会が許されるようになったが、何か尋常ではない雰囲気を感じとっているようで、園では保育者のそばを片時も離れず、姿が見えなくなると泣くといった状況が続いた。毎日、クラスの礼拝でTちゃんのおかあさんのために祈っていたある日、みんなに「お祈りしてくれてありがとう」と言う。

そして、「ママにプレゼント作りたい」と言って、毎日、絵を描いて持ち帰るようになった。運動会の日、車いすで母親が見に来てくれたことをとても喜び、その時のことをよく話していた。この頃、周りの子どもたちは、以前よりよく泣くようになったTの姿や毎日の祈りで何かを感じているようで、3歳児なりの気遣いを見せるようになった。Tが泣いていると、手をつないであげたり、黙って頭を撫でてあげたりしていた。

しかし、ついにみんなの懸命の祈りと看病もむなしくTの母親が亡くなる。

保育者は、この時、どのように対応していけばよいのか苦慮しつつも「抽象的な言葉ではなく、人間が生まれたこと、そして、生き続けたその延長線上に死があり、死をも含めた生が『与えられた人生』であるということ、改めて自分自身がしっかりと受けとめ」子どもたちに伝えた述べている。

このことに対し、保育者と子どもたちの間で、次のようなやりとりがあった。「Tちゃんのパパは、お星様になったんだって！いやだよー」と泣き出した子。それに対し「お空に行ったの？」と聞き返した子。保育者、「天の神様の一番近くにいったの」「ふーん、ぼく、おかあさんと一緒にいい！」「○○ちゃん泣いちゃう」と言った子。保育者「Tちゃんも今、きっとそういう気持ちになっていると思うの」子ども「かわいそう！Tちゃんに会いたいな」

また、その日、子どもたちのいつもしている幼稚園ごっこ先生役の子どもの祈りは、「やさしい天の神様、Tちゃんを守ってね！一緒におやつを食べます！このお祈りを」という祈りであった。

翌日、子どもたちの多くが「Tちゃんは？今日もこないの？」と聞く。お祈りの後、「Tちゃんが来たら先生がだっこしてあげてね。ぼく、Tちゃん来たよって教えてあげるから」と言った子どももいた。

数日後、Tちゃんが登園したが朝から泣いていた。円座になって話している時も保育者の膝に座っていた。いつもなら、「私も」といつてくるのだが、「Tちゃんだいじょうぶ？」と声をかけたり頭を撫でたりしていた。

その後、父子家庭となったため、Tと妹は保育園に入園することになる。ただ、Tの通っていた園に卒園まで行かせて欲しいという希望が母親の遺言であったので状況がゆるされ

るまで休園という形になった。

保育者が子どもたちに「Tちゃんがしばらくお休みする」ということを伝えたとき、「どうして?」「またくるの?」「びょうきなの?」と質問責めにあつた。ある子どもは、目にいっぱい涙をためていた。保育者が「神様はTちゃんのことを愛してくださっているから、一番いいことをしてくださる。Tちゃんもみんなも大好きなイエスさまと一緒にだから同じだね!」と話しているうちに少し落ち着き、「またきてね!」「Tちゃん、またあそぼうね」と声をかけていた。Tは、保育所に行くことをしっかり受けとめている様子だった。保育者が胸がいっぱいになってTを抱っこしていると「先生、泣いたらだめなのよ。Tちゃん、またくるからね」と逆に慰められたという。そして、1年3ヶ月の間保育所に通った後、再び元の園に戻ってきたのである。

園の配慮によって同じ保育者がTを担当することになった。保育者は、再会したTが、わずか4歳で最愛の母親を失うという大きな経験をし、悲しみや心の葛藤の中でどれほどの痛みを伴う成長をとげたか日々実感しているという。友だちが少しでも悲しんでいると、とても敏感に反応して黙ってそばにいてあげる。相手の思いを理解しようと根気よくその言葉に耳を傾ける姿。そして、素直に自分の状況を受け入れる姿などである。しかし、「死」については、非常に現実的に受けとめていて、友だちが「死んだらお星様になるんだよね」と言ったとき、「ちがうよ。お星様じゃないの。もう会えなくなって、見えなくなったの。体がなくなっちゃったんだもん。でも、神様の近くにいるんだよ」と話していたということである。

### 【考察】

◇事例①は、3歳という年齢にあつて本人も、また、周囲の子どもたちも赤ちゃんの死をどのように捉えてよいかわからないということもあるであろう。しかし、わかっているにもかかわらず、保育者が事実を事実として丁寧に心をこめて話し、本人や家族がどんなに悲しんでいるかを伝えていることは大変重要である。そのことによって、死という現実がどのようなものかを子どもは、少しずつ学んでいくのではないだろうか。

◇幼い子どもにとって、肉親の死、特に養育者の死は、最も影響を及ぼす出来事であるとシントラーも述べている。彼女は、また、死だけでなく、幼い子どもにとって母親との分離、すなわち、母親が長い間旅にでたり、不在であったりすると死に対する不安として生じてくると言う。この不安は、おそらく原初的な分離不安の極端なケースであるとも言えるとも述べている。

事例②の場合、Tは、上に記したような母親の入院という「長い間の不在」により、徐々

に情緒不安の状態が強くなっていく。しかし、保育者の配慮と周囲の子どもたちの暖かい見守りによって、その状態は随分と緩和されている。記録に示されているような思いやり、「先生がTちゃんを抱っこしてあげてね」は、自分がして欲しいことをしてあげて欲しいという子どものやさしさ、3歳児らしい思いやりを強く感じる。

また、母親の死という現実は、子どもにとってあまりにも過酷であるだけに、概しておとなは腫れ物に触るような対応をしてしまうものである。この場合、保育者は、苦慮しながらも、抽象的な言葉ではなく、人間の死が生延長線上にあり、死をも含めた生が与えられた人生であることを踏まえた上で本人及び子どもたちに対応している。

このような対応によって、Tは、どれほど救われたであろうか。保育所への1年3ヶ月の入所と元の園への復帰という生活の変化のなかで大きな成長をみせていることがその証しである。

◇事例①②のどちらも共通する点の一つとして、祈りや礼拝という要素がある。シントラーは、神を穴埋め役として登場させるような宗教教育についてくぎをさしている。すなわち、良くて悪くても、おとなの都合によって神を利用することについて述べている。「例えば、幼稚園から家に帰る途中で、危険な回り道をさせないために、いつでもそこにおいて、すべてを閲覧になっている神によって、小さい子どもを脅すことは正しくありません。子どもはその時、まさに神の全能を何か不愉快なものと感じるでしょう。また、子どもは、やがて、神様はそのような場合、都合のよい教育補助、一種の穴埋め役であることに気づくでしょう。両親の力とファンタジーが尽きるところで、すべてを知り、恐怖を感じさせる存在が担ぎ出されるのです。それは、宗教的であったとしても、最悪の意味での権威主義的教育です」と言うのである。しかし、この例のように、保育者の信仰と信念によって、神が私たちの人生と深く関わっている方として、目にみえないがいつも共にいてくださる方として媒介される時、子どもはそのような存在を受け入れていく。しかし、それは、おとなによってあるがままを受容されていると子どもが認識していることが前提である。

#### 第4章 『死』を取り扱った絵本

『死』を取り扱った絵本を出版順に紹介したい。

- ①『おじいちゃん』、ジョン・バーニングム 作（たにかわ しゅんたろう 訳）、ほるぷ出版、1985年
- ②『わすれられないおくりもの』、スーザン・バーレイ 作（小川 仁央 訳）、評論社、1986年

- ③『せかいいちゆうめいなフレッド』 ポージー・シモンズ 作 (かけがわ やすこ 訳)  
佑学社、1988年
- ④『ずーとずっとだいすきだよ』、ハンス・ウィルヘルム 作 (久山 太市 訳)、評論社、  
1988年
- ⑤『ぶたばあちゃん』、マーガレット・ワイルド 文、ロン・ブルックス 絵 (今村 葦  
子 訳) あすなろ書房、1995年
- ⑥『天使のおともだち』、キューブラー・ロス 作、金子 千晶 絵 (阿部 秀雄 訳)  
日本教文社、1995年
- ⑦『さよならっていわせて』、ジムとジョアン・ボウルディン 作 (きたやま あきお  
訳) 大修館書店、1997年
- ⑧『ダギーへの手紙』、キューブラー・ロス 作、はらだ たけひで 絵 (アグネス・チャ  
ン訳)、佼成出版社、 1998年

⑦『さよならっていわせて』について

原題は、「Saying Goodbye」で、作者は、カリフォルニア州立大学ロサンゼルス校経営学教授Jim & Joan Boulden。著者自身の子どものホスピスでのボランティア活動の経験を通して生まれた作品と言われている。ぬり絵になっていて、「やぁ！げんきかい？



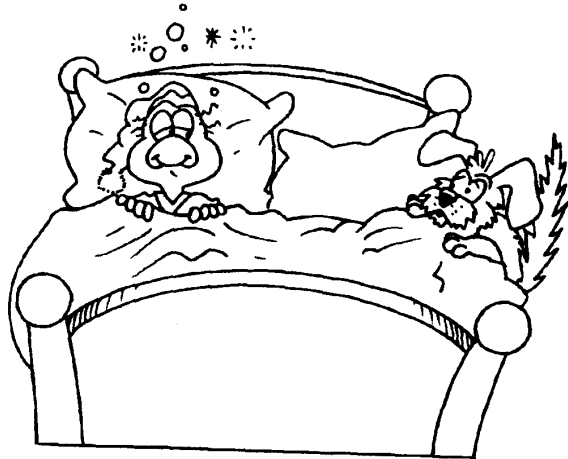
生きものは みんな  
いつかは 死ぬんだ

犬さんも ねこさんも お花さんも そうだし  
おとうさんも おかあさんも  
おばあちゃんも おじいちゃんも  
みんな みんな そうなんだよ



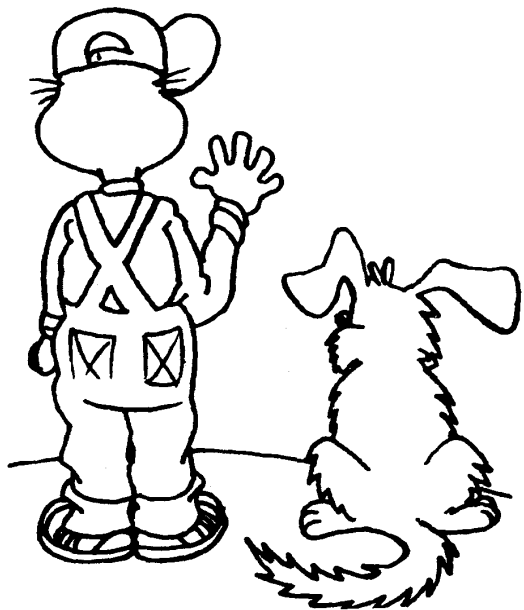
ねむるのって 気持ちいい  
ほくたちは まいはん ねむって  
まいあさ 目をさます

死ぬのは ねむりとも ちがうんだ  
死んだひとは にどと 目を さまさないんだよ



おはよう!

死ぬことが 近づいて きたときには  
さようならって いわなきゃ ならない  
さようならを いうなんて とっても つらいことだよ



さようならっていうと どんな気持ちに なるのかな?  
ここに かいてみて くれる?

ほかのお友だちは ほくと 同じように  
死ぬって とっても こわいと 思ってる

だから にげだしちゃう  
それは あたりまえなんだよ

死ぬって とっても こわそうだもの



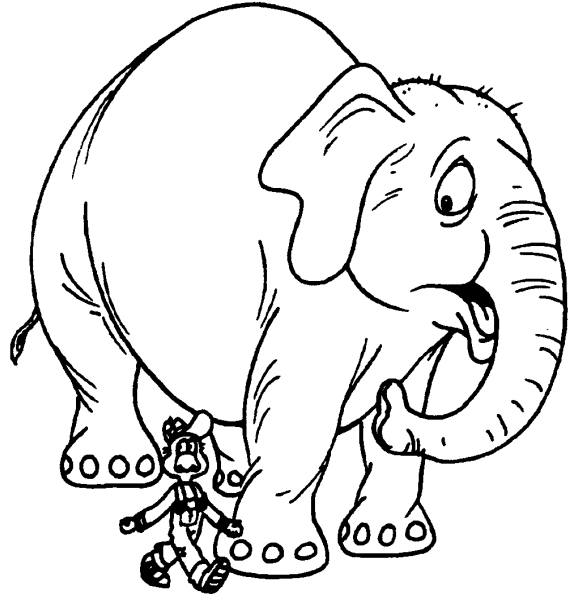
きみは こわいと 思ったとき どんなこと するの?  
ちょっと かいてみて くれる?

死のはなしを聞くのをやめてかくれてる？  
 それとも死ぬことなんかないって思うかな？



かくれるとしたら きみはどこにかくれるの？  
 ここにかいてみてくれる？

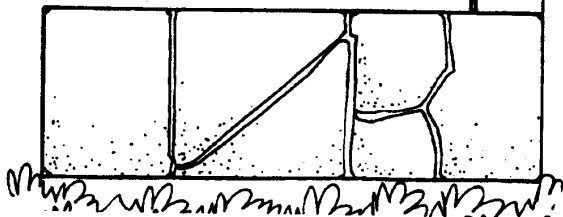
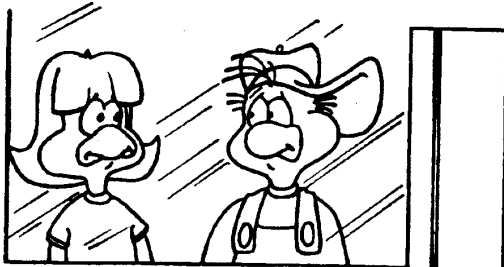
死ってまるでぞうさんのようだよな  
 知らんぷりするにはものすごく大きいし おもいもの



どうしてきみは死のことを知らんぷりできないの？  
 ちょっと考えてみてくれる？

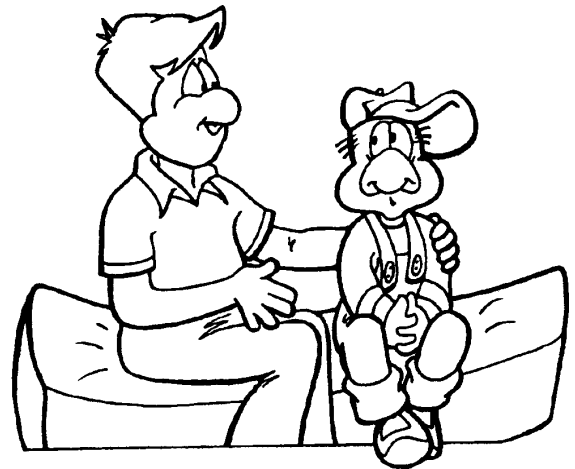
ほかのひとが 生きてるのに  
 きみの大切なひとが 死んじゃうのは  
 おかしいって思う？

でもね みんな だれかの大切なひと なんだ  
 みんな大切なひとを なくしてること  
 ちょっと おぼえておいてね



もし しんじているひとに  
 きみの かなしい気持ちを はなしたら  
 きみは ほっとするかも しれないよ

だって そのひとは きみの気持ちを よく わかってくれるから



きみは たれに 自分の気持ちを はなしたいかな？ 考えてみてね

おはなししたいひと

木のははちつても木は生きている

木がかれても森は生きている

ひとつのいのちが死んでも  
かならず生まれかわるんだ

春になると

木はあたらしい木のはをつけ  
草やお花はバツと大地からめを出し  
子ねこさんや子犬さんが野原を駆けまわる

いのちはいろいろなところでピカピカかがやいてる

このことはきみの子どもや  
その子どもの子どもが生まれるときも  
ずっとずっとつづいていくんだよ

29

みんな生きることや死ぬことを  
いろいろ見たり聞いたりする  
それでも生きること死ぬことを  
はっきりこたえられないこともあるよ

きみのかぞくや先生は生きることや死ぬことを  
もっともっとたくさん知ってる  
だからふしぎだなあと思ってることを  
いろいろ聞いてみてね

きみはぜったいひとりじゃないってことおほえておいてね  
きみのかぞくや先生お友だちが  
いつでもきみのそばにいるんだよ

みんなとってもきみがすきなんだだいすきなんだ  
だいすきだってこといつまでもかわらないよ  
ずっとずっときみのことがだいすきなんだ



31

ぼくのなまえはバディ」というやさしい語りかけの言葉で始まっている。また、主人公の語りかけに従って読み進むうちに主人公と共に「死」について考えていくことができるようになっている。全32ページでワークブック形式になっている。英語圏国だけですでに二百万部以上の出版数があり、全米ホスピス協会最優秀賞を受けた。(アメリカでの出版は、1992年)

○まず最初のページは、ある子どもにとって特別に拘わりのあった人との別れをどのようにするべきかというところから、「この絵本を○○さんの思い出にしようね」とにがおえをかいたり写真をはるようになっている。

○次に、人間は、自然の一部として存在していることを述べている。P 3～P 5までを見よう。木の葉が落ち、それが細かく砕けやがて分解されて土に戻る。そして、そこから新しい芽が出て春になるときれいな花を咲かせる自然界の法則を「生きたものが生まれて死ぬのは小さなやくそくなんだ」と唱い、この自然の約束をまもるのは人間、すなわち、ぼくたちであるとする。そして、「これはね、いのちは生まれかわるってことなんだよ」と言い、生きている延長上に「死」があるという。

○P 6には、大きな字で「生きものは、みんないつかは死ぬんだ」と明言し、P 7～11まで死とはどういう状態になるのかを説明している。髪の毛が抜けたり爪の生え代わるの

も一つの死であり、雪だるまが溶けて水になることも、落ち葉や花が土にもどることも死であること。そのことと同じように人間も死ぬことによって土に埋めたり、火で燃やしたりし土にもどることを述べている。しかし、死んでしまった人間は、心と体は別々になるので痛くないと説明する。

○P12～13には、死は老人だけに訪れるものでなく病気や事故によっても死ぬことを述べている。

○P14～16には、実際に死ぬことが近づいた時、どのように「さよなら」をしたらよいかやさしく語りかけ、さよならって言うとどんな気持ちになるか書いてみるように勧めている。

○P17～19には、「死」と正面から向き合うとはどのようなことなのかを述べている。「わざとわらって、ごまかしちゃうお友だちもいる」し、勇気があるふりをしたり、「ぼくと同じようにとってもこわい」と思って逃げ出す人もいる。しかし「それは、あたりまえなんだ」とし、そんなときは、どんなことをするのか書いてみるようにと促す。

○P20には、「死」をぞうにたとえ、死の大きさ、重さについて言い、「どうしてきみは死の子とを死らんぶりできないの？ちょっと考えてみてくれる？」と自分自身への問いを投げかけている。

○P21～23は、大切な人を失うことは、とても悲しいことであり、「もっとやさしくしてあげればよかった」というような悔いがあるかもしれない。しかし、大切な人にとって良かったと思うこともあることを示唆している。それは、「苦しいことからさうよならだきるからだよ」と言い、「たくさん泣いてもいいんだよ」と述べる。

○P27には、大切な人が死んでも、その人が育てた花や使っていたものからその人を思い出すことができること。そして、大切な人は、私たちの思い出の中でいつまでも生きていくということを述べる。

○P29～31には、もう一度はじめのテーマに戻り、「いのちは、いろいろなところでかぴかかがやいている」といのちを讃美する。最後に、「みんな生きることや死ぬことをいろいろ見たり聞いたりする。それでも生きること死ぬことをはっきりこたえられないこともあるよ」と人間の限界を述べる。また、一人だけで考えないで、家族や先生にも「不思議だなぁ」と思っていることを聞くようにと勧め、「みんなきみがすきなんだ。だいすきなんだ」と繰り返している。



## おわりに

子どもの発する様々な問いは、「生きること」に拘わる根元的なものが多いということをはじめに述べたが、「死」に対する問いは、まさに前に向かって「生きる」子どもの象徴的な姿ではないだろうか。なぜならば、「生きること」に真剣であればあるほど、その問いも真剣になり、深められていくと思うからである。

第一章、子どもと小動物の死において、子どもが「死」とはなにかを学んでいく段階があり、それは必ずしも発達年齢によるのではないこと。また、小動物の死と自分自身とを関連づけて考える子どももいることを覚えておかなければならないということである。

また、保育者の態度としては、生き物を保育環境としてどのように扱い飼育するかという大きな問題を持ちつつも、小動物の「死」と直面したとき、その「死」を隠さず、子どもとともに命の限界性を考え、悲しみを共有することの重要性を考えた。

第二章、子どもと老人の死においては、子どもはおそらく本能的に老人と「死」は近いということを知っているということである。ここで重要なことは、事例に示されたように、今後誰にでも訪れる身近な人との別れをどのように迎えるかという問題である。事例は、母親が園長と相談することにより、祖父との別れができた良い例である。反対に子どもの祖母の一人が亡くなっても通夜も葬式も参加させず、一切そのことに触れさせなかった例も聞いている。いつか解る事実を隠された子どもは、「死」をどのように受け止めるかという問題もさることながら、もっとそれ以前の深刻な問題があるように思われる。

第三章、子どもと兄弟・両親の死の例からも、おとなも子どもも、いつ訪れるかしのれない「死」について備えをしておかなければならないということ学ぶことができる。この場合、保育者は子どもと親に拘わり、この辛い事実を受けとめ、それらの人々の立場となり、考え、言葉をかけている。しかし、このような対応は、日常的にこの問題に関心と意識を持っていなければ、出来るものではない。このような意味で第4章で紹介した絵本は、有効であろう。しかしながら、これら全ての絵本が日本以外の国で作られているのも、現在の日本の状況を表している現実である。欧米においては、子どもへの「死の」教育がすでに始められていると聞く。「死」の教育とは、単に目の前で起こった「死」のみを扱うのではなく、自然観、人間観を伴ったグローバルな視点で考えていこうとするものである。このような観点で「さよならっていわせて」というワークの伴ったこの絵本は、画期的である。子どもの苦しみ、悲しみにおとながどのようにしたら寄り添いつつ、「死」をともに生きることができるか深く考えさせられるのである。

## 参 考 文 献

「希望への教育」レキターネ・シントラー、訳 加藤善治・茂 純子・上田哲世、日本基督教団出版局、1992年

「キリスト教指針」、キリスト教保育連盟、1989年